

南アフリカの貧困とエイズ

当麻 実(2017.9.27)

はじめに

アフリカと私

アジアとアフリカの共通点は？

20世紀のアフリカ大陸

ヨーロッパのアフリカ植民地支配

1960年 17カ国が独立 反帝・反植民地のうねり

念願の独立と現実のギャップ→あいつぐ軍事クーデター、内戦

米ソ冷戦終結で戦略的援助も停止→欧米のアフリカ離れ、中国の進出

サハラ以南アフリカの貧困とエイズ

国連の人間開発指数(HDI)ランキング(教育水準、健康・寿命、所得水準) 188カ国

後発開発途上国の三分の二はサハラ以南。半数は1.25ドル以下(貧困ライン) 1.95ドル

HIV陽性者 3670万人のうち7割が南部アフリカ・中央アフリカ(国連調査)

HIV(ヒト免疫不全ウイルス)/AIDS(後天性免疫不全症候群)とは

日本 19.5%

南アフリカの HIV/エイズ状況と貧困

アパルトヘイト時代の南ア(白人、カラード、黒人、アジア系)

国土の87%白人地域、不毛の13%黒人地域(バンツースタン)

労働力の確保→都市周辺のタウンシップ(黒人居住区)

南アは世界一の HIV 感染者の国

HIV/エイズ患者のメモリーボックス

SOETO(旧黒人居住区)の居酒屋にて

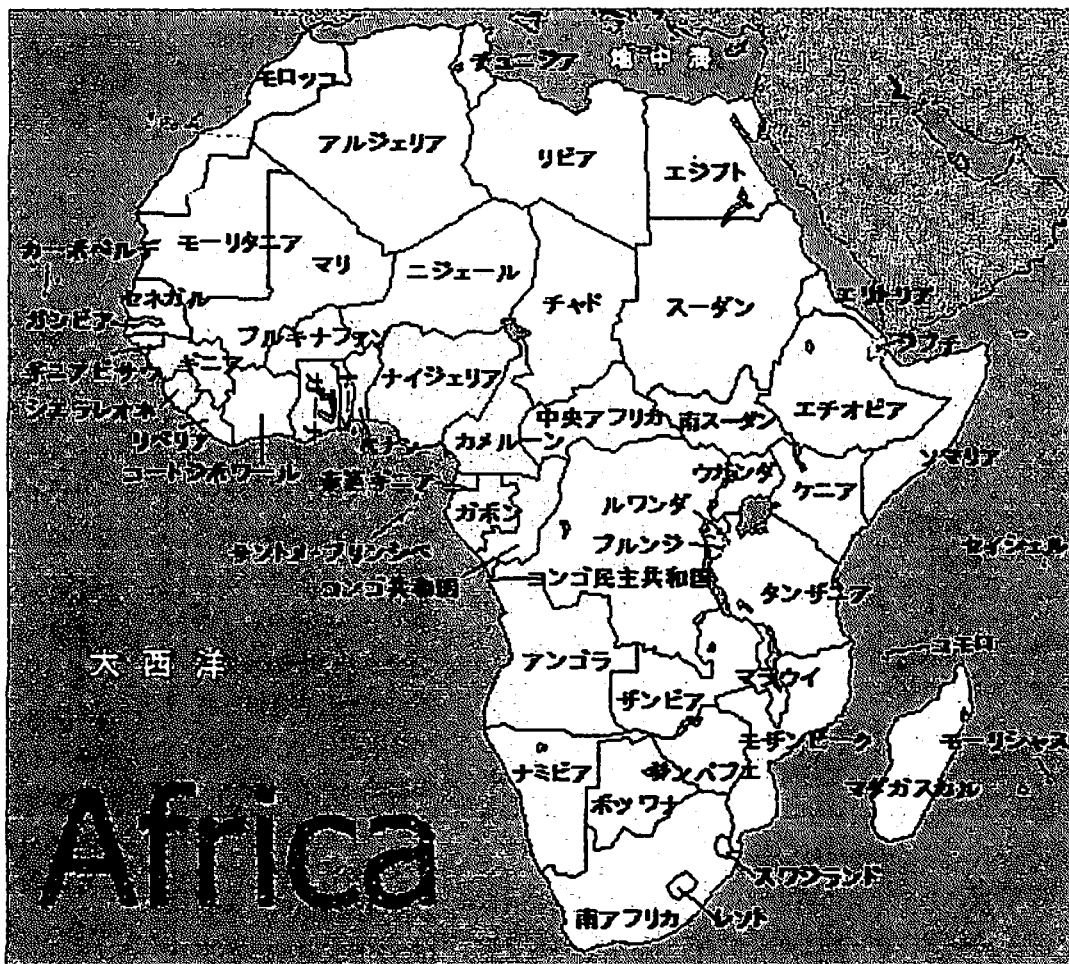
南アの貧困ライン 月700ランド(為替17円・2003年)

48%が貧困ライン以下の生活 高失業率25%、広がる所得格差

人種隔離は撤廃されたが……。簡単でない貧困からの脱出

掘立小屋が林立する旧黒人居住区→敗戦直後の日本

おわりに



アフリカ基本データ

※アフリカ大陸の面積 30,221 km²(USA、中国、インド、メキシコ、ペルー、仏、スペイン、パプアニューギニア、スウェーデン、日本、独、ノルウェー、伊、NZ、英、ネパール、バングラデシュ、ギリシャの合計 30,102 km²) e.g.日本の 80 倍。

※南北は 8,000km、54 개국(国連加盟国)、人口は約 11 億人/世界人口 72 億人

ヨーロッパ帝国主義列強のアフリカ分割(1912 年)

イギリス、フランス、スペイン、ポルトガル、ドイツ、イタリア、ベルギーの 7 개국

アフリカの年(1960)の独立国

ガーナ(1957・英)、ギニア(1958・仏)、1960 年→カメルーン(仏)、セネガル(仏)、トーゴ(仏)、マダガスカル(仏)、コンゴ(現コンゴ民主共和国・ベルギー)、ソマリア(英)、ダオメ(現ベナン・仏)、ニジェール(仏)、オートボルタ(現ブルキナファソ・仏)、コートジボワール(仏)、チャド(仏)、中央アフリカ(仏)、コンゴ(現コンゴ共和国)、ガボン(仏)、マリ(仏)、ナイジェリア(英)、モーリタニア(仏)

南アの貧困とエイズ

市議会議員 当麻 実

◆居酒屋に無料コンドーム◆

ヨハネスブルグの南西に人口三〇〇万人といわれる広大なタウンシップ(黒人居住区)ソウエトがある。高台からみると平屋の住宅がはてしなく建っている。このソウエトは一九七六年六月、反アパルトヘイトの大規模な蜂起がおき多数の死傷者が出た所だ。このソウエトにアフリカ専門旅行社の道祖神駐在員

の案内で、通常の観光客がいけないピリ地区に一泊ホームステイすることになった。

シビーン(非合法の居酒屋)での夕食前、少し散歩することにした。夕暮れ時からはとても危険なので歩けないといわれ、近所の屈強な青年のボディガードつきで、付近の住宅地を散歩した。まだ路上にいる子どもたちが多く、かつての日本のような居酒屋といっても非合法なので店の看板があるわけではない。個人住宅のガレージにテ

(3) (第三種郵便物認可)



ソウエトの居酒屋で楽しく雑談



ホームステイ先のコズイさん夫婦



陽気なソウエトの子どもたち

をみていう必要があるわね」と。HIV/AIDSに対する偏見は根強い。エイズで亡くなくても公言できないことがある。金のかからないメロリーボックスは、癒しの過程、また家族に思い出としてプレゼントできるという。またお互いがサポートできるように感染者同士が助け合っている。病院のNGOスタッフは「一九九二年の時は、妊娠の千人中三人がHIV陽性だったが、昨年は三二〇人の妊婦が感染している。この一〇年間で一〇〇倍にふえている」と語った。今回の南アの旅は、アパルトヘイト後のタウンシップに住む沢山の黒人、広がるエイズ患者などをこの目で確かめて、重い気分になるツアーであった。しかし、この現実には日本と無関係ではない。利潤のためにアパルトヘイトに加担したわが国の姿勢も無視はできない。また障害者やエイズ患者への偏見・差別は根強い。「地球から所沢へ、所沢から地球へ」という視点を大事にして、この旅を今後の議会活動に生かしていきたい。

(終)

夫婦共働きである。酔いがまわったのか、雑談を早々にきりあげてベッドに入った。夫婦とも早朝からヨハネスブルグへ仕事にでかけ起きた時にはもういない。カギは居酒屋に渡すことになっている。よくみると玄関ドアにさらに鉄格子のドア、ガラス窓も同じくついている。ソウエトは犯罪が多いというが、この防犯策に妙に感心した。

◆南アの深刻なエイズ状況のなかで◆
居酒屋で無料のコンドームが置かれるほど、南アフリカのエイズは広がっている。世界で最初のエイズ患者がアメリカで報告されてから二〇年余になる。最近の国連資料によるとHIV/AIDS感染者は、世界で約四二〇

万人、そのうちサハラ砂漠以南は二九四〇万人。南アの感染率は二〇―二五%になっている。ソウエトの近くにバラグワナ病院がある。ベッド数は三千床以上ある大きな病院だ。この病院内のエイズ・カウンセリング室で、カウンセラーとHIV感染者の話聞いた。ケープタウンのワークショップでも実践していたメモリーボックスを使って、そのなかに自分の人生を記録する、たとえば六つの窓に自分の人生の思い出を絵と簡単な文章で書く、HIVでも希望をもつて生きていく、という方法である。この病院ではビデオに収める人もいるという。

HIV感染者のオルガさんは「妊娠の検査で感染がわかり翌年子どもが生まれたが家族には伝えていない。話すのが怖い」と語る。すると隣の人が「相手

～半世紀前の青春の想いを胸に～

国際友好委員会 当麻 実

今から50年前、ぼくはホヤホヤの明大アフリカ研究会に所属していた。1950年代末から60年代初めにかけて、アフリカ大陸はイギリス、フランス、ポルトガルなどヨーロッパの植民地から続々と独立していた。半世紀前は、ガーナのクワメ・エンクルマ大統領、ギニアのセク・トゥーレ大統領がアフリカの民族独立運動のリーダーで活躍していた。

今年2月、ぼくは初めて西アフリカの旅にでかけた。西アフリカは感染症の多発地帯。渡航前に黄熱病のワクチン、マラリア予防薬、さらに医者から破傷風、A型肝炎、髄膜炎菌予防のワクチンを打たれてしまった。注射などは全額自己負担なのでかなりの出費になった。

エチオピア経由でナイジェリアのラゴスに到着。そのあとは、ベナン、トーゴ、ガーナをめざして約2400キロを車で移動という予定だ。どの国も観光コースというのが少ない。原色の衣服、キャッサバ、ヤムイモ、バナナなどを売っている賑やかな路上市場を目にする機会が多い。

ナイジェリア側の国境では出国のためわずかな距離を何回も車がストップ。ガイド(マリ人)に役人が「ああでもない、こうでもない」と難くせをつけて、際限なく賄賂を請求してきたという。ベナンからトーゴへ。ありがたいことに、ここはもう国境という目にみえる柵もない。

西アフリカの歴史には奴隷貿易がつきまとう。ベナンには17世紀初頭からのダホメ王国の歴史がある。一般に奴隷貿易は、ヨーロッパの白人がアフリカで奴隷を捕まえて売るというイメージを持っているが、そうではない。例えば、このダホメ王国は、白人から小銃や大砲を得るために、敵対部族を奴隷狩りして白人商人に売っていた。

そんな過去の歴史もあるが、のどかな農村地帯では車を止めて野外ランチとなる。近くには人家がない。どこからともなく一人の少年がわれわれの食事風景を見ている。そのうち大きな薪を頭にのせた4人の女性たちが近くに来る。またぞろ子どもたちがやってきた。昼食の余りものを彼らにあげた。だが手をつけない。おかしいなと思っていたら、かなたから一人の老人が現れ、食べ物に少し手をつけた。このあとみんなも食べ始めた。まずは長老から手をつける、日本ではお目にかかれない風景だ。

電気も水道も、トイレもない民家。そのうちの一軒を見せて頂いた。土で固められた小さな家、屋上にはサイロのような穀物庫。台所にはかまど、煮炊き用のなべなどが地面におかれている。外では子豚が飼われていた。地域のみなが貧しいので貧富の差は感じないかも知れない。今回の旅の目的のひとつは、アフリカの宗教(ブドゥー教)だが、紙幅の関係でふれられない。

ガーナの町で、2回ほどお葬式にであった。日本のお葬式はしんみりで行なわれる。ガーナの場合は、大きな音響にあわせて故人の遺族が賑やかにダンス

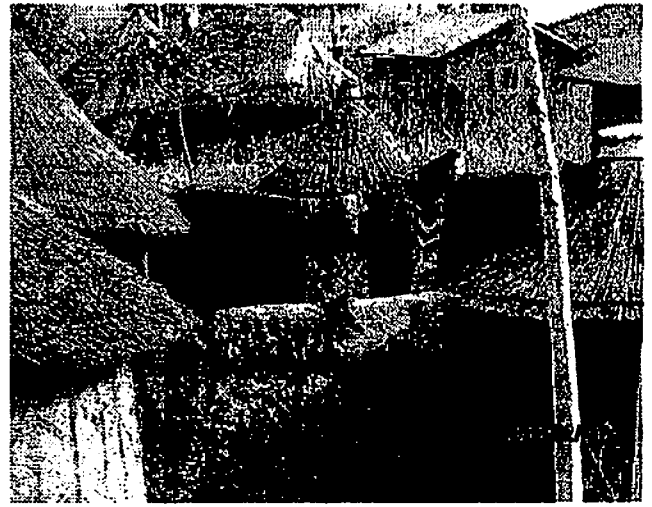
を始めた。女性たちの頭にはお菓子や飲み物が置かれ、参列者に配られる。葬式のあり方も「ところ変われば品変わる」。

西アフリカの旅でぜひ訪ねたい所があった。それは奴隷貿易が行われたガーナの要塞である。1482年ポルトガル人によって建てられたセント・ジョージ要塞。最初は交易地、後に大西洋奴隷貿易の拠点となった。近くのケープコースト要塞も見学した。西アフリカや西中央アフリカなどから3世紀にわたって約1200万人の奴隷が南北アメリカに連れ出された。奴隷船が出航するまで、奴隷は鎖につながれ閉じ込められていた。

ぼくは半世紀も前にアフリカに関心をもっていた。人生には不思議な因縁がある。高校生の頃、ぼくはアメリカの黒人の兵隊さん二人に英語を習っていた。「この人たちの先祖はアフリカから……」。この出会いが原点かもしれない。今回の旅は、半世紀前の青春の想いを実現した旅でもあった。



市場では野菜や魚の薫製も売っている



サイロに見える屋根は穀物保管用



バオバブのまわりで遊ぶ子どもたち



奴隷貿易の拠点セント・ジョージ要塞